

電子教科書システムを活用した ディスカッション及びプレゼンテーションの実践

瀬良 兼司^{*1}

Email: sera@bus.kindai.ac.jp

*1: 近畿大学経営学部商学科

◎Key Words 電子教科書システム, ディスカッション, マーケティング

1. はじめに

GIGA スクール構想の推進によって、一人一台端末の整備、初等教育及び中等教育での学習者用電子教科書の提供が開始されている。このことは高等教育機関である大学においても、今後の大学入学者がノートパソコンやタブレットを積極的に活用することを前提として進学してくることから、先を見据えた対応が求められると言える。

大学では、個人所有のノートパソコンやタブレット端末を大学内に持参して学習等に活用する BYOD (Bring Your Own Device) が推奨されている中で、電子教科書システムの活用が進められている。実際に電子教科書システムを導入している講義では、学習者が予習段階で教員からの解説を享受できること⁽¹⁾や、学習者の予習内容をテキスト上で共有することによって学生間の学びあいの促進ができて⁽²⁾などの先行事例がある。

とりわけ専門科目においては、専門知識が実社会とどのように関わるかについて、キャリアを見据えながらの学習とともに、社会人基礎力の養成が期待される。とはいえ、経営学部の場合も決して就職予備校というわけではなく、学問の場として、目先の就職活動だけが目的化しないよう留意する必要がある。そこで、教室での対面講義においても、教員と学習者間の対話だけではなく、学習者間でのインタラクションによって、受け身の積極性ではなく主体的な積極性を活かした講義への参加を促す仕組みや仕掛けづくりが求められる。

以上を踏まえて、本論では、経営学部でマーケティングを専攻している学生を対象とした専門科目において、電子教科書システムを活用したディスカッション及びプレゼンテーションの実践事例を紹介する。

2. 実践事例

本論の事例は、近畿大学経営学部商学科のマーケティング戦略コース 3 年次以上を対象とした「マーケティング・ケーススタディ (半期 15 回 2 単位)」での実践事例である。履修登録者は 40 名程度のクラスであり、ケース教材に基づいた事前課題の提出を前提として、グループ・ディスカッション (グループ討議) 形式の講義を進行した。

石井 (2009) は、実務経験のない学部学生に対するケース教育について、①討議をしながら理解を深めていく「対話重視」のやり方、②すぐに結論を求めるのではなく道に迷いながらの「学習経験重視」のやり方を挙げたうえで、知識の量が大事なのではなく、「自分で考える」という姿勢をもち、自分で考えを深める経験を積み、腹に落ちた理解をすることがポイントであると指摘している⁽³⁾。この

ことは、教科書の説明だけでは「他人事」となりがちな内容について、ケースで議論することで「自分事として考える習慣づけ」にも関わる。

当該科目では、ディスカッション用のケースが掲載されている教科書として黒岩・水越 (2023)⁽⁴⁾を採用し、事前課題の提出を必須としたうえで、学習者によるグループ討議を実施した。黒岩・水越 (2023) は、各 Unit に「ケース」が用意されており、予習として当該 Unit で扱われている内容を踏まえながら、学習者が考えることができる構成が特徴である。

学習者はグループに分かれて所定時間内に討議内容をまとめた資料を提出し、提出資料の中から教員が選定したチームによるプレゼンテーションの後に、アノテーション (テキストボックスやリンク) の共有機能を活用した教員によるフィードバックを行った。

講義当日 (90 分) は、講義開始前に当日のグループ分けを発表したうえで、①講義連絡と解題 (10 分)、②グループ討議 (35 分)、③プレゼンテーション実施チーム選定 (10 分)、④プレゼンテーションの実施とコメント (25 分)、⑤全体フィードバック (10 分) という流れで進行した。各グループには論点整理及び役割分担の可視化のために、紙のワークシートを配布した。これは、学習者全員が、手書きに対応したデバイスを持っていないことへの配慮でもある。グループ討議を踏まえて作成したプレゼンテーション資料 (PDF 化したファイル) は、電子教科書上に埋め込まれたアノテーション機能を通して、フォームからファイル提出を行った。

学習者は、4~5 名一組のグループに分かれて、「司会」「時計」「書記」「自由」という四つの役割の中から一つを担当した。グループは、毎回メンバーを変更しており、初めての相手や組み合わせでのグループ討議となるように編成した。教員側からは、学習者全員がリーダーシップを発揮しながら、時間制約の中で協働し、目標から逆算して意見提示・意見交換・意見集約を進めるように意識づけを行った。これにより、開始時に寄せ集めのグループ (集団) であった状態から、終了時にはチーム (組織) への変化を期待した。

グループ討議中、教員は机間巡視を行い、ディスカッションに参加できていない学習者を確認したり、やり取りに関して行き詰まった場合は手持ちの予習内容を尊重する形で助言したりして、学習者の様子を観察しながら、予め用意していた論点以外のポイントを電子教科書上に加筆した。

3. 学習者による評価

ここでは、上述の実践を踏まえて、『考える習慣づけ』『主体的な積極性』『対話や学習経験の重視』という三点から学習者による評価を紹介したい。学習者による評価は、最終回のコメントシートとしてデータを収集した。

まず、『考える習慣づけ』に関する評価としては、「私はこの授業を通して自身で考える力を身につけました。他の授業では基本的に先生がレジュメを説明して、そのレジュメを見れば答えが書いてあるような課題が多かったのですが、本授業では自身で様々なケースのマーケティング手法を考えました。自身で考え、他の人の意見と共に噛み砕いて理解することにより、様々な角度からの意見が得られたので大きな気づきになりました。」や「予習の段階で自分の意見を持った上でグループディスカッションを行うという形式であった為、思考力がついたと思います。また、人の意見を聞いて自分では思いつかなかったような考え方にも触れることができてよかったです。」

「初めてこういったタイプの授業を取ってみて、『これぞ経営学部が学ぶこと』と思った。事例に合わせてマーケティングの専門用語や戦略を勉強する為、他の授業のようにただ暗記してテストして忘れるみたいなことが無い。ちゃんと考えていないとグループの話についていけない為、しっかり勉強することができ有意義な授業であった。」といった反応があった。

続いて、『主体的な積極性の発揮』に関する評価としては、「私が1番学びになったことは、初対面の方とのグループディスカッションの難しさである。それぞれのメンバーが内向的、外向的など様々で自分の意見を発信するのもメンバーの意見を引き出すのもすごく難しかった。この授業が始まった当初は私もあまり意見を発信できず、またまとめたりすることも苦手だった。途中からはそんな自分を変えたく思い、積極的に意見を発信したりメンバーに聞いたりするようになった。その結果当初よりも先生に発表の班に選んでいただくことが多くなった。」といった反応があった。

そして、『対話や学習経験の重視』に関する評価としては、「自分と似たような意見でも考え方が少し違ったり、1から100まで全くおなじといった考えの人がいなかったりしたということを改めて学んだ。そして1人よりもグループになって、1つのことを一緒に考える事で生まれるアイデアが沢山あることが気づいた。協力する事の大切さも学べた授業だった。」や「提示された課題に対しての意見をチーム内で持ち寄り、ディスカッションを行う過程が学びに直結したように感じた。チームのメンバーごとに意見が異なったときに、どの意見を優先させればよいか、また組み合わせればよいかといった選択を時間の限りがあるなかで行うことは私にとって凄く実践的だった。」、「今まで色んな講義を受けてきましたが、このようなグループディスカッションの形での講義は初めてで非常に楽しく新たな学びがありました。特にグループで一つの議論を行うというのはなかなか経験できるものではなく、役割を分担して、意見をまとめて、発表するというプロセスがとても実施的で、今後においても必要なスキルになってくるため、自分のスキルアップにもつながったなと感じています。その中で色んな議論を行いました。自分が持っていない視点から議論を持ってきたり、

アンケートや調べたものから議論を繰り広げたりと新たな視点も多く楽しく学べました。」、そして、「短い間にチームの意見をまとめ、パワポを完成させ発表できるようにすることは、最初は難しかったが、授業を重ねる毎に意見の回し方に慣れ、パワポを作りながら意見を出し合うなどすることでスムーズにできるようになった。講義を受けている中で、1つの戦略で攻めていくのではなく、様々な戦略を組み合わせ、どの戦略がよい、他の戦略は合わないのか取捨選択していくことで、斬新なアイデアなどが生まれるのだと気づいた。1つのことに捕われるのではなく、色々な方法を考え、そして問題解決のための短期間の戦略だけではなく、将来も考えた長期的な戦略を考える必要があると感じた。」といった反応があった。

4. むすびにかえて

本対面での講義科目において、電子教科書システムを活用しながら、ディスカッションやプレゼンテーションを組み込んだ講義デザインにしたことで、授業に出席することだけを目的とするのではなく、考える習慣づけや主体的な積極性の発揮が促された。グループ討議の実施は、学習者間のインタラクションを促進し、アウトプットによる専門知識の運用と定着や、他者への傾聴、時間的制約がある中でアイデア創出と成果物の提出など、電子教科書システムを活用した講義デザインに関する知見を蓄積する試みとなった。

また、対話や学習経験が重視され学習者間のディスカッションによる創発によって、学習者にとって新たな気づきを得られたと評価できる。実践事例は、講義科目ではあるものの、これまでの学びの内容を自らの実践において考え、応用させる機会を創出した。そして、大前提として、学習者全員が教科書を持参してグループ討議を実施した。学習者による評価からも、予習としての準備学習と相まって、講義時間での教育効果を発揮できたと言える。

電子教科書の利活用では、学習者の講義参加における学習経験の向上を企図した講義デザインが欠かせない。単なる紙媒体の代用として電子教科書を導入した場合、電子教科書を活用することが目的となってしまう、手段の目的化に陥る可能性があることには留意すべきだろう。

大学では詳細な授業計画を示す「シラバス」において、講義の目的や到達目標とともに、準備学習の内容や目安となる時間の記載が求められている⁽⁵⁾。そのような中で、教科書の記載欄において教科書を指定せずに、参考文献を再構成した配布スライド資料による講義進行が存在している。配布スライド資料のみの場合、学習者全員が必ずしも指定文献を手元に置いて講義に参加するわけではないことから、補助教材として配布資料を位置付けている場合には、知的財産権の侵害という問題に留意する必要がある。このような現状に対して、教員と学習者が教科書を手元に置きながら、教員の解説や学習者のコメントを共有することができる電子教科書システムは、教員と学習者の共創による学びのプラットフォームとして位置付けることができるだろう。

今後の課題としては、クラスサイズが大きくなった場合の運営面における対応が挙げられる。また、電子教科書システムの学習ログデータを活用し、時間外学習の可視化を図り、柔軟性のある講義進行を検討する必要がある。

参考文献

- (1) 瀬良兼司「オンデマンド型授業において学生間の学びあいを促進するデジタル教科書の活用方法 (2023.10.4 公開)」
『碩学舎 note』
<https://note.com/sekigakusha/n/n076c82ed07b5> (2024.6.30 閲覧)
- (2) 瀬良兼司「学生視点からのデジタル教科書を活用した講義 (2022.7.27 公開)」『碩学舎 note』
<https://note.com/sekigakusha/n/n6f2aacc9dc80> (2024.6.30 閲覧)
- (3) 石井淳蔵：“ビジネス・インサイト：創造の知とは何か”，142 頁，岩波書店 (2009) 。
- (4) 黒岩健一郎・水越康介：“マーケティングをつかむ(第3版)”，有斐閣 (2023) 。
- (5) 文部科学省「大学の教育内容・方法の改善に関する Q&A (平成 26 年 2 月更新)：Q3 日本の大学の現状について、『授業に出席しなくても単位が取れる』『勉強しなくても簡単に卒業できる』などの声を耳にしますが、これについて大学はどのような対策を講じているのでしょうか。」
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/003.htm (2024.6.30 閲覧)